（第三種郵便物認可）

ディドロの今日的意味検討

没後二百年記念国際シンポの意義

中川久定

十一月十九日から二十三日にかけて、京都大学が主催し、フランス外務省と河合文化教育研究所の後援をえて、ひとつの国際シンポジウムが開催された。題して「ディドロ、および十八世紀の日本とヨーロッパ」という。発表者は、フランス人十五人、日本人十五人、内外の参加者三百人という盛況であった。

日欧比較研究の祖

だが、と読者はここで不思議に思われることだろう。シンポジウムの主題の冒頭にとりあげられているディドロというのは、一体なに者なのか、と。

本年は、日本ではほとんど知られていないこの人物ディドロの没後二百年に当たっている。そのため、彼の祖国フランスはもちろんのこと、フランス以外の十三カ国でも彼を記念して、さまざまな学会が開催されている。

今年のこの世界的規模での記念行事の盛況が端的に示しているように、ディドロは、十八世紀フランスが生んだ、そして今なおその衝撃的な影響力を失っていない巨大な思想家、文学者なのである。

それでもなお、読者はいぶかしく思われることだろう。ディドロを記念する学会で、なぜ彼の名前と並んで「十八世紀の日本とヨーロッパ」が出てくるのか、と。

この疑問に対して、私はこう答えよう。ディドロは生前、本巻十七巻、図巻十一巻に及ぶ、当時としては最大規模の「百科全書」を刊行している。そしてこの事典のなかに、すでに日本と西欧とを共通の尺度のもとでとらえようとする立場が、明確に出現してきている。つまり、ディドロこそが「日本とヨーロッパ」との比較研究のいわば最初の提唱者だったのである、と。

共通の土台の上で

たとえば、この「百科全書」の項目〈日本〉（筆者ジョクール）は、ボルテールの「風俗試論」に依拠しつつ、日本人は極めて「自尊心」が強く、またすべて「自殺」に走りたがる人種であり、その点で、同じような島国の住民であるイギリス人とよく似ている、という。

また項目〈日本人の哲学〉（筆者ディドロ）は、十八世紀フランスの非キリスト教的知識人と江戸時代の儒者との間に見られる考え方の類似を具体的に指摘した上で、儒者の努力によって日本の社会と文化が漸進（ぜんしん）的に改革されていくことに強い期待を寄せている。

以上で、私たちのシンポジウムの主題の意味は明瞭（めいりょう）であろう。事実、私たちが狙ったことは、まずディドロとの比較に関してとどまり、かつそれとともに、さまざまな点で並行現象を示しているヨーロッパと日本の十八世紀を、ディドロを媒介としながら、共通の土台の上にのせて比較検討してみよう、ということであった。

最終日の午後には、私とモンペリエ大学のプルースト教授とが暫定的総括を行ったのちに、二時間を超える白熱した討論が、日仏両国語で続けられた。総計三十に及ぶ発表と最終日の討論から、どのような成果がえられただろうか。ディロドに関しては、最も新しい研究の数々が、日仏両国の研究者にそれぞれ強い刺激を与えた。

相違点をめぐって

十八世紀の日仏比較に関してはどうだったろうか。領主対領民間の契約関係、ブルジョワ的世俗文化の台頭、すなわち宴会、サロンの楽しみ、美術、演劇、音楽、文学、美的満足感をともなった科学（たとえば博物学）などの分野で、日仏両社会の興味深い類似、あるいは並行現象が確認された。だがそれと同時に、そこには確かに根強い相違点が存在している。いわば日本人の精神とフランス人の精神との形の違いのようなものが。それは一体なんだろう。

フランスの新聞「ル・モンド」に京大シンポジウムの報告記を書いていたフランス大学教授ロラン・デスネ氏が、記事の表題に、この相違点を端的に示す表現を使いたいが、なにかいい言葉はないだろうか、と私に尋ねた。とっさに私の口をついて出たフランス語は〈Geometrie et Ramification〉（幾何学と植物の入り組んだ枝分かれ）であった。一方の、フランス的分析の精神と、他方の、状況に現前してくる全体をまるごととらえようとする日本的な心の形。デスネ氏は、まさにそれだ、と答えた。

多くの難問をかかえて幕を下ろしたこの京大シンポジウムは、新しい研究に向かっての第一歩に過ぎない。すべては閉じられることのない未来に向かって開かれている。そして私たちの次の中心課題のひとつは、この幾何学的な分割の精神と、還元主義的な錯綜（さくそう）の把握との差異をめぐるものとなるに違いない。（京都大教授・フランス文学）

× × ×

ながかわ・ひさやす氏　昭和六年東京生まれ。京大文学部卒。ディドロ、ルソー、ボルテールを中心にしたフランス十八世紀研究を続け、今回のシンポジウムを組織した。著書「自伝の文学―ルソーとスタンダール」「ディドロの『セネカ論』」「難るルソー―深層の読解」など。

59

中経 12.8